



帝京大学小学校だより

帝京大学小学校

遊びの中にも学びがある

帝京大学小学校 校長 石井 卓之

私の小学生時代は、「Always 三丁目の夕日」「ちびまる子ちゃん」の世界観そのものでした。映画やアニメを見てみると、出てくる風景、流行った歌や言葉、電化製品、登場人物の服装など、「あった、あった、これ。」の連続です。

生まれは東京の三鷹市。今はほとんど見かけなくなった木造1階建ての2軒が繋がっている長屋。けっこう広い庭があり、離れを建て増したり、池を造ったり住人たちは思い思いにカスタマイズしていました。我が家には、母親が植物好きだった関係で色々な植栽が植えてありました。特に、庭の中央には屋根より高いシュロの木があり、その木を登り屋根に上がり、遠くの景色を見たり日向ぼっこをしたりするのが大好きでした。ある夏の夜、庭で手持ち花火をしながら蚊を減らそうと思いシュロの木の根元に火を近づけたら、木の皮に引火して火柱が立ち、危うく火事になるところでした。離れに住んでいた祖父母に、これでもかというほど叱られたことは、今でも忘れられません。

都営住宅には、異年齢の子どもたちがたくさんいました。小学校が終わる時間帯になると、住宅の中にある子ども公園では場所の取り合いが始まります。それまでは自由に遊んでいた幼児が、小学校低学年の登場で場所を明け渡していきます。その後、中学年・高学年の登場で仕切りが徐々に変化していきます。(私は、森の樹液に集まる昆虫が力関係で変わっていく様子に似ていると思っていました。最上位はカブトムシのようです。)

実はこの公園の遊び方には、脈々と培われてきた暗黙のルールのようなものがありました。それは、6年生のガキ大将がいたことです。ガキ大将が登場し、「今日は〇〇をして遊ぶぞ。」という、みんなでその遊びをするのが習わしだったのです。ガキ大将は、もちろん投票で選ばれる訳ではありませんし、立候補でもありません。自然と今年はその子がガキ大将だと、集団が認識するのです。

- ・けいどろ(「どろけい」という地域もあります)。2チームに分かれた鬼ごっこ。
 - ・ろくめし(「ろくむし」という地域もあります)。三角ベースの場での手打ちのベースボール。
 - ・島出し。ビー玉や鉄ビー(丸い鉄製の球。鉄道車両のベアリングなど)を島から出したら相手の所有になる。
 - ・釘刺し。1人が地面に五寸釘を投げ刺し、次の人が釘を投げ刺して相手の釘を倒すことができれば相手の所有になる。
 - ・いろいろ。(地面の円グラフの中に、走って3分程度で行ける場所を様々書き、遠くから石を投げて入った場所に行くと帰ってくる。早く戻れた人が勝ち)
 - ・靴飛ばし(足で靴を飛ばし飛距離を争う。時々草むらの奥深くに入り、見つけるだけで遊びが終わる)
- 覚えているだけでも30種類以上あります。ガキ大将には大きな権力があり、自分がその日にしたいことが決められるのです。一方、ガキ大将になるためには必須の条件がありました。それは腕力や威圧力ではなく、優しき、発想力と調整力です。幼児から高学年までが一緒に一つの遊びをして楽しむためには、ルールの工夫が必要です。小さな子たちのために、「お豆、お味噌」という体力に合わせてハードルを下げたルールを創り出すのは大事な仕事です。また、異年齢の子どもが遊ぶのでけんかも日常茶飯事。いかに短時間で納得解を導き出し、遊ぶ時間を確保するのも腕前です。5年生は、6年生のガキ大将の立ち振る舞いをつぶさに見て、自分がガキ大将になるためのモデルケースとしていました。そこには、社会に出てから必要な資質・能力の育成の場がありました。

私も6年生になったらガキ大将になろうと思い、チャンスを待ち、腕を磨いていました。ところが、住宅の立て替えが決まり、とうとうその野望は果たされずに終わってしまいました。しかし、当時の経験は今の仕事にとっても役立っている気がします。

これからの「学び」の時代には、意欲が重要です。「好きこそものの上手なれ」、遊びも学習も自ら取り組んでいける子どもたちを帝京大学小学校で育てていきます。

